
インフィニット・ストラトス-時を越えた修羅-

ジャッキー

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニット・ストラトス一時を越えた修羅一

【Nコード】

N9380Y

【作者名】

ジャッキー

【あらすじ】

怨みを持つ人間の成れの果て・・・鬼
それを狩る修羅の一族・・・叢雲
戦国の世を生きる叢雲の若き長・・・叢雲刃
女尊男卑の世に蔓延る人々の闇
平成に流れ着いた修羅が、その刃で鬼を斬る

時を越える忍

天正3年、5月3日

美濃国にある山。

人も草木も眠り、闇が支配する世界

唯一の灯である月光の下を、二つの影が交差した。

影は、闇の中を蜘蛛のように不規則に

それでいながら、まるで目の前が見えているかの如く、障害物にぶつかる事なく木々の間を抜け幾度となくぶつかり合う。

十合とも言えるぶつかり合いの末、二つの影は互いに向かい合って止まった。

月が動き、二つの影をその灯が照らす。

それによって、二つの影は己の姿を光の元に晒した。

一方の影

それは、人であった。

だが、それは果たして人と呼べるのだろうか。

全身を覆うのは、この時代では見ない体にフィットするような漆黒の鎧。

毛一本すら露出していないその鎧は刺々しく、それでいて禍々しさを帯びている。

首から上も、顔・・・否、頭部全体を鎧と同じ漆黒の仮面で隠している。

何より、特徴的なのが、額の部位にある二本の角

その姿は・・・人というよりも、限りなく人に近い鬼と呼べるものだろう。

相対するもう一つの影

その姿は、はっきりと言って異形だった。

身の丈は2 mを越えるであろう巨体
腕や脚は丸太のように太く、体全体は筋肉という名の鎧で包まれている。

肌は赤黒く、肩程に伸びた髪は焰のように天を向いている。
瞳は白く濁り、口には鋸のように牙が並ぶ。

そして・・・額にある二本の角

その姿は、昔話に出てくる鬼そのものであった。

互いに見合って動かない中、漆黒の鬼が口を開いた。

「松田屋の丁稚・・・佐平」

漆黒の鬼の言葉に、赤黒い鬼・・・佐平は僅かに、ぴくりと肩を動かす。

「奉公先の番頭に人として扱われず働かされ、病に伏し・・・現世^{うつしよ}に怨みを遺して死した哀れなる怨人^{オニ}・・・」

漆黒の鬼は、佐平の成れの果て・・・鬼を見据え、背に背負った刀の柄を握り、ゆっくりと刃を抜き放つ。

月明かりを反射し、佐平の成れの果てを写すその刃を肩に担ぐように構えた。

「その御霊・・・霊世へ送ってやる」

その言葉を最後に・・・二つの影は、世界から姿を消した。

否、姿を消したというのは誤り

二つの影は、間違いなく世界に居た。

ただ、人智を越えた速さで動き、交差しただけである。

その証拠に・・・

二つの影は、互いに背を向けて立っている。

先と違うのは、漆黒の鬼は刃を振り下ろした姿勢であり、佐平の成れの果ては右腕を突き出した姿勢でいる事だ。

二つの影は、互いに動かない。

1秒、2秒、3秒・・・

5秒経った時、佐平の成れの果てに動きがあった。

地面に両膝を突き、ゆっくりと体が・・・腰から上が、斜めへとずれていく。

やがて、ドチャツという水気を帯びた音とともに、文字通り両断された上半身が地面へと落ちた。

「・・・」

漆黒の鬼は、己が両断した成れの果ての骸を一瞥すると、刀を振って血を払い鞘に刃を収める。

そして、闇の中へ姿を隠そうとしたとき・・・異変が起きた。

両膝を突いていた下半身の断面から、黒い靄が上がり、漆黒の鬼の体に纏わりついたのだ。

「・・・！」

鬼は、体を動かして靄を振り払おうとする。

だが、靄は振り払われるどころか、浸食するように体を覆っていく。やがて、鬼の全身は靄に完全に包まれ・・・そして、溜まった水が排水口へ流れていくように

靄は収縮し、鬼もろとも、世界から消えた。

時は変わり、未来

年号は天文から平成へと流れたある日

一人の女性が林の中に佇んでいた。

「何だ・・・この男は」

女性・・・織斑千冬は、自身の足下を見て呟く。

その足下には

漆黒の忍装束を纏った、齢15ほどの男が倒れていた。

邂逅

朝

草木や人、命が目を覚まし、闇の世界が終わりを告げる刻
日の光が瞼を刺激する事により、俺はゆっくりと瞼を開けた。

「ん・・・」

僅かにぼやける視線と思考の中、俺は昨夜の事を思い出す。

昨夜・・・確か、俺は松田屋の丁稚が鬼になったという部下からの
報告を受け、鬼を斬った。

そして・・・そうだ。

鬼の断面から靄が出て、俺は呑み込まれたのだったな。

俺は、そこまでを思い出すと、自分の体を確認する。

鎧は既に解けていて、身に纏っているのは、一族の装束
続いて、辺りを見回す。

俺が寝ていたのは布団のようだが・・・視点が高い。

とりあえず、布団から出たのは良いが・・・膝程の高さの台に布団
を敷いている光景は異様だった。

立っている地面も、板や畳と違って硬い・・・岩でも使っているの
か？

（壁の一部が四角く切り取られている。これで外に出られるか？）

そう思って、切り取られた部分に手を伸ばすが、指先に硬い感触を
感じた。

「なんだ・・・これは」

外は見えるのに、手を伸ばせば硬い感触
何かの妖術か？

そう思い、俺はその硬い感触がするものに触れながら、辺りを見回
す。

よく見ると、この空間は異様だった。

天井からは布がぶら下がっており、隅には見た事もない箆笥が置い

である。

それに・・・背負っていた刀がない。

まさか、俺は何処かの武将に・・・最悪、南蛮人に捕まったのか？
そういう考えが、一瞬頭を過った時だった。

「！」

俺の向かいにある戸の向こうに、人の気配を感じた・・・それも一人。

敵・・・いや、しかし、殺気は感じられない。

敵か定かではないが、此所が何処か。

俺の刀を何処へやったのかを聞くには丁度いい。

壹・・・気配の主が、戸に手を伸ばす。

式・・・戸に手をかけた。殺気を極限まで抑え、身を低く・・・獣
の如く構える。

参・・・戸を開けた・・・今だ。

俺は、踏み込む足に力を込め、駆ける。

体を限界まで低く、地面に着くほど低く

前に倒れそうな勢いを、疾走に上乘せして

俺は、戸を開けた者へと駆ける。

「失礼しま・・・へ？」

戸を開けた者は、日の本言葉で話すが・・・関係ない。

俺は、そいつの背後へ回り込み、左手を取って背に回し、首へ右腕
をかける。

下手な動きをすれば、一撃で首を圧し折れるように。

「答えろ。俺の刀を何処へやった」

「え？えと・・・あの？」

相手は戸惑っているのか、間の抜けたような声で俺に声をかけてくる。

声音と触れている感触から、相手は女なのだろうが・・・それが分
かった瞬間、俺の警戒は強まった。

女・・・特に、忍としての鍛錬を行った忍は、丸腰であれ、警戒が必要になる。

何故なら・・・捕まったとしても、その身体自体が武器となり得るからだ。

このまま、刀の場所を聞いて立ち去ろうと思っていた・・・。

だが・・・

「！」

俺は、背後に殺気を感じ、咄嗟に女を話して部屋に入った。刹那ブオンッ！

俺が立っていた場所に、黒い一閃が見えた。

殺気の主は、驚いた事に女だった。

黒い見た事もない着物を纏い、その右手には黒い板のようなものを持っている。

「大丈夫か？山田君」

「織斑先生！」

織斑と呼ばれた黒い着物の女が、俺が取り押さえていた女・・・山田に声をかける。

だが・・・俺は、別の意味で驚愕していた。

何故なら・・・

「つ・・・ばき・・・？」

山田と呼ばれた女

幼さの残る、これまた見た事もない着物を纏っている女が

俺の女房・・・椿と瓜二つの顔をしていたのだ。

私・・・織斑千冬は、今朝遭遇した行き倒れの男と相対している。時代劇で見るような忍装束を着た男

世間で言う「コスプレ」とでも言うのだろうか、と思ったが・・・

（あの身のこなし・・・）

私が振るった出席簿を躲したときの動き、そして・・・立っているだけのよう見え、その実、いつでも動けるように構えている姿ただの一般人という訳ではなさそうだ。

「さて、目が覚めたのなら話は速いな・・・。お前、何者だ？」

対する私も、相手の動きに警戒をしながら問いかける。

ちなみに、山田君は私の後ろに隠れ、怯えた様子で男を見ている。

「・・・むらくもやいば 叢雲刃だ。此方も一つ聞きたい」

「お前が持っている刀ならば、此方で預かっているぞ」

男・・・叢雲が、質問したいと言ってきたので、刀の事を話すが・・・。

「違う・・・此所は、何処だ？美濃か？それとも尾張か？」

「？此所はIS学園だ。まさか・・・それも知らずに侵入したとでも言うのか？」

叢雲の言う美濃や尾張が何かは分らんが、私は此所・・・IS学園について説明すると、叢雲は困惑したような表情を浮かべた。

「あい・・・えす？何だそれは？南蛮から伝わった火筒か？」

「火筒？」

困惑したように呟く叢雲の言葉が聞こえたのか、山田君が私の後ろから声をかける。

「火筒を知らないのか？『種子島』とも呼ばれる、南蛮から伝わった武器の事だ。尾張の織田も使っていたと聞くが」

叢雲の言葉を聞き、私は叢雲が言いたい事がなんとなく理解出来た。

「火縄銃など、何百年前の話をしているのだ・・・」

そう呟き・・・私はふと、私たちと叢雲の間にある違和感を感じた。

「山田君」

「はい？」

私は、後ろにいる山田君に声をかけた。

「今すぐ・・・日本の歴史について調べてくれ。時代は・・・戦国時代だ」

「え、良いですけど．．．どうしたんですか？」

「いや．．．少々下らない考えなのだがな」

そう言うと、山田君は「分かりました」と短く返事をして、端末で私が話した単語で調べ始めた。

さて．．．このくだらない考え。

「叢雲」

「何だ？」

「今は．．．何年だ？」

当たってくれるなよ．．．？

「何年だと？今は．．．」

だが．．．

「織斑先生、出ました。尾張や美濃は昔の日本の地名．．．そして．．．」

「天正3年だろう？」

「鉄砲が伝わったのが1543年、織田信長が1575年．．．当時の年号では、天正3年に長篠の戦いで使っています」

世界とは、理不尽なようだ。

覚悟（前書き）

ども、作者のジャッキーです。

本作品は「SF忍者アクション活劇」となっております。
時系列は、本編スタートの1ヶ月前となっています

覚悟

「叢雲。お前に一つ言いたい事がある」

織斑と呼ばれた女から告げられた言葉は．．．俺にとって理解不可能な話だった。

「此所は．．．いや、この世界．．．これも違うな、この時代は．．．お前のいた時代ではない」

「．．．何が言いたい？」

織斑の言葉がいまいち理解出来なかった俺は、眉根を顰めて問いかける。

俺の言葉を聞いた織斑は、自身でも説明出来ない事態に直面したような、筆舌し難い表情を浮かべた。

「一つ聞くんが．．．お前が覚えている出来事で、一番最近に起きた出来事．．．戦はなんだ？」

「？．．．．．尾張の織田と甲斐の武田が、したらがはら設楽原で大きな戦を起こしたと聞いたが．．．」

「そうか．．．山田君」

織斑の質問に、俺は自分の中で最も新しい出来事を思い出して話す。それを聞いた織斑は、山田と呼ばれる．．．椿と瓜二つの女に声をかけた。

「はい。天正3年5月21日、三河国長篠城をめぐり、織田・徳川連合軍3万8千と武田勝頼軍1万5千との間で起きた戦争．．．『長篠の戦い』。今から．．．435年前に起きた出来事です」
．．．．．なに．．．？

「その7年後．．．天正10年6月2日、京都の本能寺にて明智光秀の謀反により、織田信長．．．自刃。その3日後、羽柴秀吉により明智光秀．．．討ち死に。その数年後．．．」

椿．．．いや、山田は、手に持っている板のような物を見ながら言葉をついでいくが．．．どういう事だ？

織田が明智の謀反によって自刃？

羽柴秀吉が天下を統一？

それより先は．．．俺の理解を超えていた。

話の殆どが理解出来ない。

「そして．．．昭和20年、第二次世界大戦末期．．．日本に二発の原子爆弾が落とされ、日本は降伏．．．敗戦を迎える．．．以上が、現在．．．2010年より65年前までの．．．この国で起きた歴史上の出来事です」

「簡単に言えば．．．お前の記憶上、現在である天正3年．．．1575年は、私たちにあって400年以上も昔ということだ」

織斑たちの言葉に、俺の思考は．．．停止した。

「は．．．何を馬鹿な。貴様ら、もしや俺を騙そうとしているのか．．．？」

俺の言葉を聞いた織斑は、小さく溜め息を吐くと『ついて来い』と言い、部屋から出て行った。

何のつもりかは知らんが．．．騙すつもりであれば．．．そう思い、俺は織斑の後をついて歩いた。

床と同じく、岩で出来たような硬い階段を何度か登った先．．．鉄の扉があった。

「此所から、外の景色が見える．．．私たちの言葉が嘘か、自分の目で確かめろ」

そう言われると同時に目の前に広がった景色は．．．俺の知っているものではなかった。

海を挟んだ向こう岸には、幾つもの巨大な柱が建っていて、四角い鉄の蛇が橋にぶら下がって這っている。

唯一変わらぬ蒼い空には、奇妙な形の白い鳥が二本の白い尾を引いて空を飛ぶ。

そして．．．人が、面妖な鎧を纏って空を飛んでいた。

（馬鹿な．．．このような奇天烈なもの、天正3年には無かった。南蛮の話聞いても．．．あんなもの、話に出てこなかったぞ）それらから．．．俺に許される事の一つ。

織斑たちの戯れ言．．．此所が、天正3年より400年後の日の本だと認めることだけだった。

「受け入れるかどうか．．．それは貴様次第だ」

「あ、織斑先生．．．」

外の景色を見て、呆然としている叢雲さんに声をかけて校舎に入ろうとする織斑先生に、私は声をかける。

「そういえば、次は山田君の授業だったな．．．私が代わりに授業をするから、君はあの男が変な気を起こさぬよう見張っててくれ」

「変な気って．．．」

「未だ信じ難いが．．．いきなり、400年後の時代に來たんだ。

自分の知っているもの全てがない場所で、自分独りだけという辛さ。

．．．何か、変な気を起こさない方が可らしい」

織斑先生の、その言葉を聞いて．．．私はハッとした。

叢雲さんは、私たちとは違う。

私たちにとって当たり前であるこの世界が．．．彼にとって、当たり前ではない

自分を知っている人間が誰もいない、自分の知っているものが何も無い。

それは．．．どんなに絶望的だろうか。

私は、今も外の景色を見ている叢雲さんを見て、胸が苦しくなった。もし．．．自分が同じような立場に立ったら

そう思い、ゾツとした。

織斑先生は『よろしく頼む』というと、校舎の中へと入っていく。

私たちは．．．会話もなく外の景色を見た。

叢雲さんには．．．この景色が、どう見えるのだろうか？

そう思っていると、ふと、叢雲さんが口を開いた。

「．．．女房と、よく峠から麓の村を見ていた。辺りを山に囲まれた、緑に覆われた小さな村だ」

「村．．．ですか？」

「ああ．．．田畑を耕し、貧しいながらも人々が笑っていた．．．その村を見て、女房は言っていた。『人は、人を怨み、憎むだけのものではない。だが．．．人が生きていれば、必ず怨みや憎しみはある』と」

私は、黙って叢雲さんの話を聞いていた．．．。何を言いたいのかは分からない。でも．．．。

「此所は．．．天正3年の日の本ではない。しかし．．．此所に人は生きている」

その言葉の端々．．．いや、全体から、彼の覚悟が感じられる。

「人が生きていれば、必ず怨みや憎しみはある．．．ならば、俺は．．．」

そう言って、叢雲さんは私の方を向いた。

だが．．．何故だろう？

「俺は、それを断ち斬る刃となろう。たとえば、叢雲の者が．．．修羅の一族が、俺一人であろうとも」

その凛々しい姿を．．．何処か、ずっと昔に見た事があると感じたのは。

覚悟（後書き）

自分を知る者が居ない、異なる時代で生きていく覚悟を決めた刃
そして、そのサポートをしようと思った千冬と真耶
その3人に科せられた試練・・・それは

次回「時代錯誤」

時間の流れに置き去りにされるといふのは残酷であり、時に滑稽である

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9380y/>

インフィニット・ストラトス-時を越えた修羅-

2011年12月6日11時47分発行